

---

# 『あゆみ先生』改訂版

鳳雛

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『あゆみ先生』改訂版

### 【Nコード】

N3083E

### 【作者名】

鳳雛

### 【あらすじ】

僕は、思いきって告白した。大好きなあゆみ先生に……。それも、『童貞を卒業させて下さい』と。当然、結果はNG。嫌われてしまった。僕は、急いで謝罪の手紙を書いた。あゆみ先生に、僕の真剣な気持ちを解って貰いたかった。

## （前書き）

少し加筆しました。

また、スケベな言葉を直しました。

基本は先生に恋する男子生徒の、青春のエピソードです。

なお、

小生の小説の文章は、台詞部分に『』を使わない、  
というやり方です。

小生の小説に慣れていない読者は、読みにくいかもしれませんが、  
慣れてしまえば、テンポ良く読めるはずです。

複数回読んで、鳳雛という作家の世界に馴染んで下さい。

僕は坂上卓也。

高校3年生。

僕の、男性特有のある感じがやすい一部分が、敏感に反応していた。  
ただ、

あゆみ先生と雑談してるだけなのに。

そう。

そうなんだ。

僕は、あゆみ先生が  
好きなんだ。

あゆみ先生は英語の教師で、

若くて美人なんだ。

背が高く、脚も長くて細くて美しい。

それこそ、ファッションモデルみたいだ。

男子生徒の憧れの的である。

僕は決めた。あゆみ先生に大人の男にしてもらった。

しかし、  
解っている。  
うそだ。  
無理だ。  
駄目なんだ。  
そんなことは！

所詮、妄想だけで終わりなんだ。

しかし僕は、  
駄目もとで、  
怒られること、  
嫌われること、  
それを覚悟で  
高校の卒業式の数日前に、  
あゆみ先生に告白をした。  
『あゆみ先生、好きです。お願いします、僕の童貞も一緒に卒業させて下さい』と。

当然、撃沈だった。

普段優しいあゆみ先生が、僕を睨んで怒ったんだ。

卓也くん、ガツカリよ。『童貞を卒業させて下さい』なんて、気持ちが悪いわ。  
私に近寄らないで。

と、本気で言われて、  
僕はマジへこんだ。

あ ゆ み 先 生 。

こんなにも  
好きなのに

もうすぐ卒業なのに、まったく口をきいてくれもしない。  
視線もそらされる。

僕は決めた。こんな感じのまま、  
卒業なんて、

出来ない。

だから、謝罪の手紙を書いた。

僕の真剣な気持ちも込めた。

『本気なんです』

と。

とにかく、伝えたい気持ちの全てを書いた。

先生はまだ怒っていて、

受け取るのを拒否した。

でも、僕は土下座までして謝り、また、お願いした。

解った、読むわ。でも、また、イヤらしい内容だったりしたら……  
いいわね、覚悟してよ！

と、

あゆみ先生は言っ

てから、手紙を受け取った。

翌日。

あゆみ先生と逢ったとき、  
はずかしそうに照れていた。  
なんか、そんな気がした。

けれども、何の返事もくれなかった。

玉砕したか、  
と

思った。

でも、

良かった。

気持ちを伝えられて。

そして卒業式の日。

自分の名前が呼ばれる。この時、  
涙が込みあげてきた。

もう、

あゆみ先生とは  
二度と逢えなくなるかもしれないのだから。

壇上に立ち、あゆみ先生から卒業証書を受け取った瞬間に、  
僕の涙は、



せきを切ったように  
溢れた。

ヒック  
ヒック  
泣きじゃくった。

貰い泣きした生徒もいたかもしれない。

すると、

あゆみ先生は、

僕の頭を撫でて、  
小さな声でこう言った。

ごめんなさいね、  
あなたを誤解してたみたいね。  
まさか、  
本気で、先生の事を思っていてくれたのね。変態扱いしてごめんね。  
ああいうこと、  
毎年

云われるのよね。  
あたしはね、  
売春婦じゃないの。  
教師なの。

だから、  
あなたも、  
あたしをイヤらしい目で見ている、その辺のワルガキと同じだと思  
ったのよ。  
ごめんなさいね、卓也さん。  
高校卒業、おめでとう。

先生はそう言って微笑んでくれた。

僕はゆっくり、うなずいて、涙を拭った。

最後に、  
『仰げば尊し』を、  
みんなで泣きながら  
歌った。

そして卒業式は終わった。

僕は、一度教室に戻ると、教室に向かって一礼した。  
『三年間ありがとう』

なんと、その日の夜。驚いた事に、あゆみ先生が僕の家を訪ねて来たのだ。

なんと、すっかり僕は、卒業証書を教室に忘れていたからだ。あゆみ先生は、その忘れ物をわざわざ届けてくれたのだ。

これは、これは、先生、わざわざすみませんでした。

とうちゃんと、かあちゃんがかしこまっていた。

『それでは』、と先生が帰ろうとした時に、僕は、

あ、とうちゃん！

このへん暗いからさ、先生を駅まで送るよ。  
と言った。

えらいぞ。  
卓也。

先生を駅までちゃんとおくって行きなさい。あと、ついでにいつもの店にビール2本頼む。

うん。わかったよ。

そういうことで、

僕はあゆみ先生を駅までおくりながら、  
高校三年間の思い出なんかをお喋りしていた。

駅前に来たとき、

あゆみ先生の足が止まった。

卓也さん、ありがとう。ここまででいいわ。

あ、う、うん。

卓也さん、本当にありがとう。あの手紙、大切にするわね。

う、うん。

卓也さん。

残念だけど、やっぱり、私は教師であり、あなたは生徒なのよ。だから、

あなたの童貞を卒業させてあげる事はできないの、わかるでしょ。そのへんのアダルト雑誌やビデオみたいにはならないものよ。

うん、解ってる。先生、ごめんね。

先生をイヤらしい目で見ていた僕を許してください。

解ってる。

許しているわ、もう。

卓也さん、

もう遅いから先生帰るね。

うん、

あゆみ先生、

さようなら。

さようなら、

卓也さん……

チュツ！

あ！

先生の顔が近付いたかとおもって、  
あゆみ先生の唇が僕の頬を熱く濡らした。

あ……

あゆみ先生に……  
チュウされた。

さようなら！

あゆみ先生は駅に向かって走って行った。

僕の頭は湯だっているみたいだった。  
興奮していた。

なんか、  
凄く、凄く、

嬉しかった！

あゆみ先生の、

さらりとした髪の毛と甘いシャンプーの薫り。

温かくて柔らかく熱い唇。

高級な香水の香り。

僕はあゆみ先生が、本当に好きだった。

嬉しくて涙がでた。

涙が止まらなかった。

もう二度と逢えないとおもつと、胸が引き裂かれそうだった。

あゆみ先生のお陰で、

イジメがなくなった。

あゆみ先生のお陰で、

留年しなくてすんだ。

あゆみ先生のお陰で、

自殺を考えなおした。

あゆみ先生のお陰で、

学校が好きになった。

僕はしばらく、じっと立ちすくんでいた。

あゆみ先生の、

甘い残り香の中にずっと抱かれていたかった。

あゆみ先生、

I

L  
o  
v  
e

Y  
o  
u  
.

終わり。



（後書き）

ありがちでベタな話しですが、小生の初めてのまともなラブストーリーです。

鳳雛ラブストーリー  
作品ナンバー1。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3083e/>

---

『あゆみ先生』改訂版

2010年10月26日09時25分発行